
虚界

八紘さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚界

【Nコード】

N0179J

【作者名】

八紘さん

【あらすじ】

若き絵描きが、芸術、生活に行き詰まり死のうとしたときに起きた不思議な体験

（前書き）

昭和の後期のころ、急速な経済成長に合わせて、日本の人口はついに1億人を超えた。

若者たちはひとりの例外もなく、膨大な世代人口のなかで勝ち残るための競争に身をささげることになり、自己主張はどの世代よりも激しくなった。

その反動で、世間では競争社会から弾かれたものを酷く扱う社会的風潮が蔓延していた。

それは、著しく社会的に傷つきやすい立場に置かれた社会的弱者を、多く生むことになる。

この物語は、そのひとりに起きたできごとである。

虚界

昭和の後期のころ、急速な経済成長に合わせて、日本の人口はついに1億人を超えた。

若者たちはひとりの例外もなく、膨大な世代人口のなかで勝ち残るための競争に身をささげることになり、自己主張はどの世代よりも激しくなった。

その反動で、世間では競争社会から弾かれたものを酷く扱う社会的風潮が蔓延していた。

それは、著しく社会的に傷つきやすい立場に置かれた社会的弱者を、多く生むことになる。

この物語は、そのひとりに起きたできごとである。

昭和47年の夏も終わるころ、宇宙の片隅の、闇黒の空間より地球に向かって、ひと筋の光が軌跡を残しながら伸びていく。

進路が定まっているかのように、日本列島の中央の、日本海に面した地方都市の一点に向かっていく。

到達地には、新潟県の頸城野を横切る荒川が流れていて、天端道にひとりの男が立ち止まって黒く流れている川面を見つめていた。

夕から夜に切り替わる境目の時刻のころであり、あたり一面はグレイ色に染まっていて、田んぼの畦道には人影もなく、男だけが黒いシルエットの立像を形作っている。

襟元のくすんだしわだらけのワイシャツに、折り目のないヨロヨロのズボンにビーチサンダルをひっかけている無精ひげの風貌の男を、夕闇が包んで隠している。

男は、口を閉じたまま大きく息を一回、二回と吸い込んで静かに吐き出した。

それから河川敷のゆるい斜面をすり足で降り、群生している雑草に横たわった。

雑草が程よく川風を柔らかくしてくれて汗ばんだ肌を冷やし、その心地よさと疲労感が睡眠をさそってくれる。数分も経てば、微睡んだ身体が薄闇に溶けていく。

無防備な男を標的にして、光は突き刺さすように延びてきた。

「しげる、しげる」

脳内が震えているような感覚をおぼえて目が覚めた。

不思議なことに、シャボン玉のように体が浮遊して、ひとつ、ふたつと星が輝いている空へ向かって、寝たままの姿勢でゆっくりと回転しながら上昇している。体を起こそうとしても指すら動かせない。あわてて眼球を上下左右に動かしてみても、限られている視野を見回した。

履いていたサンダルがなくなっていて、微睡む前の景色が消えていて、何が起きているのか見当がつかない。

顔が下向きになったとき、荒川の流れが床に落ちている糸のように見えたが、それもすぐに消えてしまった。

日本列島が手で掴めるほど小さく見えたときを境にして、男の体は闇黒の空間を経験したことのない猛スピードで飛行している。行く手を阻む大気もないから、風も受けず、スピード感もまったく感じられない。

20代前半と思われる男は、なんらかの超常現象に巻き込まれたと思いつき、顔が引きつってきた。

死に場所を探して朝から徘徊したが見つけられず、疲れて土手の草地に臥したことまでは憶えている。

男は、気持ちを落ち着かせるため、深呼吸をした。口に大気の吸い込む感覚がなくて、腹筋の動きも感じられない。

身体に異変が起きているとは思えず、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の感覚器の働きを確かめた。だが、闇黒の空間には、光がないため何も見えず、耳を澄ましてみても、心臓の鼓動すら聞こえてこ

ない。手に触るものもなく、臭いを嗅ぐこともできなくて、知覚器の機能は麻痺しているらしい。

体の異常を知るにつれて、恐怖が全身を支配してきて、おもわず悲鳴をあげた。

それが、役に立たない行為だとまもなく知って、不思議と気持ちが落ち着いてきた。

開き直って、脳内の隅から隅までの記憶を点検して、今の状況と似た体験を持っているか確かめてみる。だが、求める情報の欠片も見つけられない。精神が錯乱していなくて、正常に思考できることを確かめられたことが、せめてもの救いだった。

そのとき、人の声が脳波に絡み付いてきた。

「死に場所を探している者が、なぜ、恐怖を抱く」

男は話し相手の定まらぬまま、弱々しく応えた。

「おまえは誰だ」

「私は、虚界に住む者だ」

男は、しばらくの間、錯乱している気持ちを整えて、もう一度尋ねた。

「何処から話しかけているのだ」

「夢の中で、相手を見つければ話しかけようとするだろう。その相手が私だと思えばよい」

「そうか、おれは夢を見ているのか」

「それで得心がいくなら、それでよい」

「夢ならおまえの風体を見せろ」

下半身が薄っすらと消えているひとらしき者が、能面のような無表情な顔をして、ゆっくりと現れてきた。

「おまえに懐かしさを感じる。だが、だれか思い出せない」

「子供のころ、夢の中で何度も逢っていた。慣れ親しんでくれて、八紘さんと名を付けてくれた」

「そうだった、確かに夢のなかで逢っていた。いつもおれを無表情で見つめていた男だな。そのおまえが、おれをどこへ連れていく？」

「実界から、虚界の核へ連れて行く」

「虚界の核とはなんだ」

「時間を限りなく遡った約137億年前の宇宙の創成期のときにできた時空連続体の小宇宙が虚界の核であり、その一帯を虚圏と虚界人は呼んでいる」

「わからない……。そんな世界があるなんて、聞いたことがない」
「しげるは、アインシュタインを知っているか？」

「学校でノーベル物理学賞を受賞した偉人だと教えられた」

「アインシュタインは、相対性理論で時間と空間は同じものだという。彼はそれを時空間と呼んだ。時空間には過去、現在、未来の時間が同じ場に流れているはず、と計算式から明らかにした。アインシュタイン風にいえば、虚界は、過去も現在も未来も混在している世界。無限の数の虚界の集まりの小宇宙が虚圏であり、天文学者がブラックホールと呼んでいる領域の一部を成している。今、そこに向かっている」

長いような短いような沈黙のときがふたりの間に流れた。

「どうして体が宙に浮いているのだ。これは幽体離脱現象なのか？それとも、おれは死んで魂が体外離脱したのか。死者の国に向かっているのか」

「死者の国とは、靈魂の世界のことだろう。しげるは生きている。それに危険に遭遇した時に体外離脱は起きるが、しげるは心身ともに安全だ」

「理解できない説明を聞いても恐怖はなくなるらない」

「もともと死ぬつもりでいたのだから、死んだ気になって私に付き合え」

身体が吸い込まれる感覚から開放された。どうやら虚圏に入ったらしい。

「ここは何もない薄暗い空間としか思えないが……」

「わたしには、死んだもの、生きているもの、魚、動物、植物、あらゆる有機体の虚界が見えている。しげるは、実界の人間として一

時的に虚界にかどわされた身だから自分の虚界しか見えない」

「見えないもの、聴こえないものは空想の世界のできごとだ」

「虚圏では、体の感覚器は役に立たない。だから知覚機能も働かない。その機能の代わりに脳の働きを増幅させればよい。脳神経の活動を活発にして、精神意識を狭窄して瞑想状態にもっていく。そうすると本能と潜在意識が浄化されて純粹な精神に昇華される。今まで刷り込まれた知識が消え、合理的な思考で脳内が整理される。精神世界は意識が生まれる以前まで遡ることになり、虚界の核と同期することができ。人格がなくなり、喜怒哀楽の感情もなくなる。在るがままに、すべてを受け入れられる心ができあがる。そして、脳が目、耳、口、鼻の役割を果たす。そのとき、過去はもちろんのこと、未来さえも行ける能力が備わる。過去の記憶は細部まで思い出すことができ、感情を抜いて過去を振り返ることができるから、ものごとの行動の意義と本質を読み取り、理解し解明できるようになる。さあ、瞑想してみろ」

ゆったりとした水流の中に体を預けたような感覚が感じられてくる。「ここが、虚界の核なのか。映画で見た深海の中に漂っているようにしか思えないが……」

「実界の影響をまだ棄てきれていないな。もう一度、深く瞑想してみろ」

「あつ、水音らしきものが、聞こえてくる……。別の音も聞こえてきた」

「生命を受けて間もないころのしげるが、羊水に漂っている。心を集中してみるがよい。聞こえてくるはずだ。しげると母親の心音がリズムを奏でているだろう」

「うそだ。信じられない。記憶にないことを見せられても信じることはできない。おれにも分かるような具体的なものを見せてくれ」

「こどもの頃、しげるが描いた絵を見せよう」

闇黒の一点が仄かに明るくなってきて絵が顕現してくる。

「これは、校長室に飾られた絵だ。手元に戻らなくて紛失したと思

っていた」

「今の絵は東京の美術学校にいたときのもの」

「世間を知らないころの絵、世間でひとりよがりには振舞っていたころの絵だ」

「自分を誰よりも優れた絵描きだと思っていた……。でも、画廊のオーナーからは、売れない絵を描くとレッテルを貼られた。世間から相手にされず、画壇からは、つまはじきにされていた」

「挫折感に浸って酒びたりの生活を送っていたころだな」

みずばらしいアパートの一室で、円形のちゃぶ台を前に向きあっているふたりの場面が見えてくる。険しい表情の男に向かって、質素な身なりの髪の長い女が、しきりに涙声で語りかけている。

「あの子は朝子だ。こどもが出来たから生みたいと懇願された。数年前のことだ。おまえは、朝子を知っているのか」

「もちろん、知っている。美術学校の同期生で、しげるの絵のたった一人の理解者だ」

「朝子は、絵を描き続けるよう勧めてくれた。そのために同棲して身の回りの世話をしてくれた。退学して働きはじめ、月々には、絵の具代を渡してくれた。嬉しかった。でも描いても描いても公募展では落選した。自暴自棄に陥った。朝子の気遣いさえも煩わしくなってきた。そこに1日中泣いている赤ん坊がいたらおれの画家としての生活はどうなる。おれには、家族より絵のほうが大事だった」

「それで、アパートを飛び出した。行くあてもないしげるは夜汽車に飛び乗った。帰郷してから働きもせず妙高山の絵を描きながら、朝子からの電話を待っていたのだろう」

「棄てたはずなのに、寂しさから朝子が迎えにこないかと待っていた。電話番号も教えていないのに待っていた。日めくりカレンダーの最後の1枚をめくったとき、朝子は生まれるこどものために、母子で生きる道を選んで、おれを棄てたのだ……。と自分に言い含めた。それも世の常と自分を納得させた」

「働かず、家に閉籠もりがちのしげるは、格好の世間話の種になり、

家族も肩身の狭い思いをした」

「農家の婿になれと縁談を勧めていた親も、煮え切らない態度のしげるに見切りをつけた。最後の居場所もなくなり、かといって無職で金を持たない身では行き先も見つけようがない。死ぬしかない。死んで楽になるとは思わないが、今より益しだと思えた。死に場所を捜すため毎日徘徊していた」

「ひとりよがりと思い込んで、決定的な迷い道にはまってしまった」
「評論家のような物言いはやめてくれ。おまえにおれの苦しみが分かってたまるか」

「私から見れば、他愛のない事柄に思えてしまう」

「あなたは、寂寥感からくる恐怖や惨めさを知らないからだ」

「しげるの心はわたしの心。同じ思いを持っているからわかる。ただ、その先の見通しを知る力を持っているから、わたしには深刻な事態と思えない」

「慰めるのはやめてくれ。惨めさが悲しみを深くしていく。生きようが死のうが、おれの勝手だ」

「どうしてもというなら、死ぬがよい。身体を持たない私には、力づくで止められない」

「おれがこの世から消えても、世の中は何事もなく過ぎていくだろう。葬式もしないでよい。行方不明のまま世間から忘れられてしまえばよい」

「しげるの身体がなくなれば、おまえの精神世界を棲家としている私の居場所が消失してしまう。今の棲家は刺激があつて退屈しないそれに愛着もある。できることなら自然淘汰されるまで住み続けたい」

「それは頼みか、命令か？」

「願望だ。しげるには天寿を全うしてもらいたいだけだ」

「おれにも、生き永らえる意味があるというのか」

「生きることに意味がある。価値もある。人生をあがる直前になれば、しげるにも分かるはずだ」

「天寿を全うすれば、生まれてよかったと思えるのか？虚界とは、それを確かめられる世界なのか？」

「自分で未来を見るがよい」

「これは悪夢なのか、現実のことなのか……」

ふたたび闇黒の一点が仄かに明るくなつてきて建物が見えてくる。玄関には、なおざりな看板が垂れ下がり、店内には古物品がところ狭しと陳列されている。

「この建物の外観は見覚えがある」

「親父さんの店を改装した、しげるの住まいを兼ねた店舗だ」

「壁画や天井に描かれている絵は？」

「30代のころには、壁や天井をキャンバスにして、明晰夢を再現していた」

「そんなところに描く理由は？」

「食べるために始めた小さな店に、訪れてくる客たちに見せるためだ。その頃のしげるは、客の反応を見て、自分を認めてくれる相手を捜していた」

「おれは、話し相手を捜していたのか。それとも画家としての名声に未練を持っていたのか？」

「両方かも知れない。しかし、しげるは夢の世界を心霊の世界と思いつこんでいた。自分の精神が霊気となつて霊界に渡り、神や多くの霊と交わっていると思っていた。自分を特別な人間と思い込み、普通の人にはわかりづらい絵を描いていた。だから、描かれた絵はおのずと鑑賞するひとを選んでしまう」

「当然だろう。霊魂の世界を否定するものに見てもらっても、おれの想いは伝わらない」

「それは違う。鳥や虫、魚が相手なら通じないだろうが、ひと同士なら感動を共有できる。絵を通してなら、通じ合うことも容易なことだ」

「八紘さん、そう呼ぶよ。八紘さん、それは違うよ。ひとの世は、死を境にして現世と来世のふたつの世界がある。おれは来世の霊界

と交信できる能力の持ち主だ。特別な能力を持った選ばれし人間だ。その自負心がおれの尊厳を保っている。だから、どんなに見下されても、おれは誰に対しても優越感を持つことができる。だからおれの描く絵を、世間に説明する気もないし、理解されないのも仕方がないと思っている」

「そうかな。肉体と魂が別々のもので、魂は不滅な霊気との考えは、信仰心を持つひとの多い現世ではあたりまえとして人々は受け入れている。しかし、わたしの棲む虚界とは、生命があつてこそ日常的に存在している世界だ。それに虚界は、個々のひとが自覚しようがしまいが、空気のように当たり前にある世界だ」

「現世には実体のある世界の他に、実体のない世界があるというのか。おれが夢の中で霊界と交信していることは、実際は虚界の住民との交わりだったとおまえは言うのか。おれは自覚していなくても、たえず虚界に入り込んでいたというのか？」

「人間だれしもが、生まれてから今まで、虚界に包まれている。精神世界と虚界は繋がっている。眠りに入り、夢を見ることが虚界に入る方法のひとつだ。しげるは、虚界のできごとを夢の世界だと思つて自由にふるまっていただろう。思い通りの場所へ行き、虚界人と情を絡み合っていただろう。そしてモデルにして絵を描いていただろう」

「夢を見たら、むしろように描きなくなる。その情景を忘れないうちにノートに書き留める。それを題材にしてキャンバスに再現していた」

「しげるは、その行為に集中することで、寂寥感を忘れることができた……」

「孤独から逃げるために絵を描いていたわけではない。おれの絵は、純粹な精神世界を表現するために描いている。もしかしたら、共感してくれるひとが世間にいるかもしれないという淡い期待を持っていたから描き続けたのかもしれない。でも、だれも想いを受け止めてくれなかった。だから、おれの方から世間と絶縁したのだ」

「そうかな。絵を描いているときは、虚界の住人になれた。虚界に入れば虚界人が受け入れてくれた。孤独な心が払拭され、心地よい居場所を得られるからではないか」

「八紘さんは、現実逃避のために、おれが絵を描き続けているというのか？一生、孤独から逃げているというのか？世間に認められるために描くのではなく、虚界の世界に入りたいために絵を描き続けているというのか？」

「ひとの行動は感情が原動力になっている。だから理由付けしても、なんの意味もない。確かなのは、地位や名声を欲せずに絵を描き続けたという事実だ。継続は力なりという格言が実界にはあるそうだが、絵の具を買ったため働いて、絵を描き続け、住まいの二階に手作りの画廊を作って、描きためた絵を飾るという行動は、世間に感動をあたえる。せちがらい世の中だから、受け止められる人間はほんの僅かだが……。体力もなく気力も薄かったしげるが、なぜ、そこまで出来たのか。それは、虚圏の持つエネルギーによるものだ。虚圏には、虚界人のエネルギーが集まってくる。何百、何千、何万の年月か分らないが、一定のエネルギーが集まると囲みきれなくなつて放出する。その放出されたエネルギーの一部を虚界にたまたま入り込んでいたしげるは、もろに受け止めて自分の虚界に吸収した。それが、実界のしげるに影響を与えて、唐突に世間を驚かすことを成し遂げた。結果的には、しげるの運命を変えるきっかけになった。画廊に何人かの来訪者がきて、その中のひとりが、劇的な影響力をしげるに与えることになった。まさに奇跡的な出会いと言えよう」

八紘さんの顔相が崩れて消え、被さるように利発そうな娘の顔が現われた。

「前にあつたような気がするが……」

「わたしは虚界に住むものです。あなたが夢と思っていた世界で、母や恋人の役割を何度も演じています」

「どうりで、すごく懐かしさを感じる」

「情動を互いに抱いて、体を交わったこともあります」

「それで、あなたの手や足、乳房を思い出すことができるのか」
娘の顔に、やや赤味がさした。

「そのあなたが、晩年のおれの前に、実界の人として現れるというのか」

答えぬまま、娘は微笑みを残して消えた。

再び、八紘さんが目の前にいる。改めて問うた。

「彼女は、今、どこかで生きているひとなのか？」

「しげると、そんなに歳が離れていない彼女だから、もちろん生きている。今は東京で暮らしているが、結婚を機に高田に住むことになる」

「会わせてくれ。どんなひとなのか知っておきたい」

「今の彼女は虚界を自覚していない普通の娘さんだ。恋人もいるし、しげるのつけ入る隙もない」

「時の経過が必要ということなのか」

「虚界は、教えられて知ることのできない世界だ。あるとき、突然、自身で気がつく世界だ。もともと実界は、実と虚の世界が絡み合って相対関係をもった次元だ。だからふたつの世界に分けることに無理がある。個々の人間は、自覚しようがしまいが、個性を兼ね添なえた自分だけの虚界をもっている。すべてのものの虚界は、森羅万象の一部として虚圏の部分を形成している。だから、虚圏内で行き来して、交わりあつて、互いの虚界に干渉しながら混合して新しい虚界を創造し、複数の個体が同じ虚界を共有することは可能性として考えられる。だが、共に生活時間と精神の成長が同期しなければならぬ。その条件を満たしたのが彼女だった。だが、実界での生活基盤が違い、住む区域が違い、思想信条の違うふたりが偶然に出会い、関係を築き保っていくことは、実際にはありえない。自分の虚界に対する防衛意識は、言葉に表現できないほど強烈なものだからだ。ましてや虚界の存在を知る人間は実界では圧倒的な少数者だから、互いの虚界が干渉し合うことなどありえないと私は考えていた。だから、初めての事例に遭遇して虚圏の奥深さに私も驚

嘆したくらいだ。この世に神がいるならば、真に神のいたずらだといえるだろう」

「結果的には、その奇跡を体現するために、今までのおれの人生があつたと八紘さんは言うのか」

「そうだ。極限の苦悩があつたからこそ、奇跡を手に入れることができたかも知れない」

「彼女の虚界と交わることで、おれの人生は大きく変わっていくのか」

「人の幸か不幸かは、虚界にない感情だ。しかし、しげるに分かり易くするため実界の人間として考えれば、ひとの思い込みにあると思わないかね。思い込みは信念でもある。信念こそ、虚界を形を成し、性質を決める。虚界のエネルギーはオーラになって人を包み込み他の虚界人には防御網として働く。包まれた実界人はオーラに干渉されて、実界での行動指針となる。防御の堅固な虚界に侵入するひとが現れれば、オーラの形状も変わり、ひとの本質も変わってきて、ひとも変わってくる」

「彼女は、侵入者としておれの虚界を乗っ取るのか。おれのもつ世界観、いや価値観を根底から崩して新しい価値観をもたらす手助けをしてくれるのか」

「彼女は、虚と実の世界をバランスよく行き来して、生きていく能力を兼ね備えている。その力をしげるに分け与えてくれる。その調和の加減を計ること、つまり情緒的に平衡感覚を備え持つところを作り上げる手助けを、言葉の気力を使って成し遂げた。しげるは、精神が安定して心が広がってくる。入れ物が大きくなった分、森羅万象にも目を向け、動物、植物、自然現象、そしてあらゆるひと達の心を受け止め、絆を深めていく。それは、たくさんの感動を与えてもらえるということだ。金で手にいれることのできない幸せを得るということだ」

歳のころ40代の女性が20歳くらいの娘を連れて、しげるの住まいの玄関に立っている風景が現れた。

「朝子が亡くなったのを期に、娘が孫を連れてしげるに逢いにきた。マスコミに取り上げられるようになったしげるの記事を見て、心変わりをしたそうだ。心から愛おしいと想うひと達が現れて、しげるは気の張り合いができてきた」

「おれは守るべきひとを得た……ということか」

目を精一杯見開きながら、同意を求めるように問い詰めた。

「自分のための人生を送っていたしげるは、自分以外のひとのために生きる人生に変わっていく。そして娘と孫の出現は、しげるの虚界を大きく変えていく。朝子への贖罪も心の隅にあったので、子と孫のために絵を描くようになった。人生をあがる直前になって得た虚界は、たえずメロディが流れていて明るい色を基調とした風情に満ちているものだった。その空間はひとを癒すものだった。その虚界をキャンバスに再現した絵は、こどもにも分かり易い絵だった。世間のひと達は、しげるの絵に驚嘆し、誉めそやした。身近に置いておきたくて、売ってくれと寄ってくる」

大勢のひとに囲まれているしげるの場面が一転して、よちよち歩きの幼児と庭の花を見ているしげるがいる。

「だから、好々爺とした顔をして、ひ孫をあやしているんだ」

「いままでの人生での迷い道が、道草でないと納得するに十分なきことだろう。それでも、人生を捨てたいと思うかね」

「そうか、生き続けるのも悪くないかも知れない」

しげるは気がついた。八紘さんの顔相が、人懐っこい、どこにでもいるような老人に変わっているのを……。

「もつと前に夢の中でしげるに会おうとしたが、柄が長くて、その先に大きな刃を持つカマを振りかざした魔人に邪魔をされた。魔人はしげるの悪意が塊となり形になった虚界人だ。しげるは、毎晩、魔人から逃げていた。精神世界は恐れから萎縮して、わたしが入り込む余地もなかった。しげるの実界での残された時間がわずかになったころ、魔人の隙について虚圏の核へ連れてきた。虚と実の世界は、表裏一体の八紘（宇宙）だ。実界があるから虚界がある。実界

がなければ虚界もない。だから死ねば虚圏を失ってしまう。わたしは、それをしげるに悟らせるために来た」

天空に無数の星が瞬くころ、目を覚ました。
死のうという気持ちが消滅していた。

しげるは、その理由が思い当たらず戸惑った。

「実」の世界には日常性があつて実体がある。だれもが五感を通して認めることができる。それに反して、「虚」の世界は非日常性のため、他人には感じることをすらできない。

実の世界が「真の世界」と考えるひとから見れば、「虚」の世界は妄想の世界に見える。

「虚」の世界の住民から見れば、「実」の世界は、不条理に満ちた欲の世界に見える。

ここに、「実」の世界に生活拠点を置いて、「実」と「虚」の世界を行き来する生き方が、人らしい生き方を得られると考える人たちがいた。

小説、絵画、音楽、映像などの手段を使って作品を生み、ひとの知覚を標的にして送り込む創造者たちである。

「実」の世界の人々は、その人たちを「芸術家」と称え、後世の人からも畏敬をもって受け入れられている。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件とは無関係である。

（後書き）

「実」の世界には日常性があつて実体がある。だれもが五感を通して認めることができる。それに反して、「虚」の世界は非日常性のため、他人には感じることをすらできない。

実の世界が「真の世界」と考えるひとから見れば、「虚」の世界は妄想の世界に見える。

「虚」の世界の住民から見れば、「実」の世界は、不条理に満ちた欲の世界に見える。

ここに、「実」の世界に生活拠点を置いて、「実」と「虚」の世界を行き来する生き方が、人らしい生き方を得られると考える人たちがいた。

小説、絵画、音楽、映像などの手段を使って作品を生み、ひとの知覚を標的にして送り込む創造者たちである。

「実」の世界の人々は、その人たちを「芸術家」と称え、後世の人からも畏敬をもって受け入れられている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0179j/>

虚界

2011年10月6日10時17分発行